

2009年5月21日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520554
 研究課題名（和文） スペイン領アフリカにおける「原住民」政策と植民地社会の変容
 研究課題名（英文） The 'native policy' and the change of the colonial society in the Spanish Africa
 研究代表者
 深澤 安博（FUKASAWA YASUHIRO）
 茨城大学・人文学部・教授
 研究者番号：60136893

研究成果の概要：スペイン領アフリカ植民地のうちとくにモロッコ植民地に注目し、この地におけるスペインの統治・占領政策、植民地軍建設、またそれらに対する「原住民」の抵抗とくに「リーフ共和国」の様相を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	600,000	3,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：スペイン領モロッコ、「原住民」政策、「原住民」兵、植民地軍、モロッコ戦争

1. 研究開始当初の背景

(1) キューバ・フィリピンのスペイン国家からの分離と米西戦争の敗北による「1898年の破局」の後、スペイン国家の中で力を持ったのは失われた帝国の復活を求めて新たな植民地を獲得・拡大しようとする方向性だった。具体的にはアフリカのいくつかの地域、とくにモロッコをめぐるヨーロッパ列強の分割競争に分け入り、この地の住民をスペインの支配下に置くことだった。

この提起は、主に19世紀までのアメリカ植民地権益の代償をアフリカに求めようとした経済界、キューバ・フィリピンから撤退した後に新たな支配地を求めた軍部、それにスペイン国家の威信を植民地支配に求めた王室からなされた。1902年から1904年にかけて、スペイン政府は外交交渉でモロッコ北部を「勢力圏」とすることに成功する。しかし、1909年7月に始まるモロッコ人の抵抗はそれまでのスペインの「平和的侵入」

路線を転換させることになる。こうしてジブラルタル海峡の向こう側の住民を支配下に置こうとするモロッコ戦争が始められた。1912年には、フランス・モロッコ条約およびフランス・スペイン条約によって、モロッコ北部地域はスペインの保護国とされるに至る。他方、20世紀の最初の10年間に、スペイン国家は主に外交交渉によりリオ・デ・オロ（現在の西サハラ）とギニア湾地域（現在の赤道ギニア）もスペイン領に組み入れた。ギニア植民地ではスペインの実質的統治開始直後に、強制移住政策を契機とする「原住民」の反乱を見ることになる。スペインのアフリカ植民地とくにモロッコではそれまでのアメリカ植民地統治の経験を踏まえた「原住民」統治政策が展開された。しかし「原住民」のスペイン軍への抵抗は激しく、結局18年におよぶモロッコ戦争が展開された。これは20世紀前半のスペイン政治・社会に非常に大きな衝撃を与えるものとなった。

(2) なぜスペイン領モロッコの「原住民」はスペイン軍の支配に抵抗することになったのか。モロッコ戦争の過程の中で1920年代に「原住民」自身の政治体である「リーフ共和国」が出現した。ベニウリアゲール部族のカーイド（部族長）アブドゥルカリーム率いるリーフ地方住民がスペイン軍の侵入を戦争とみなすと宣言、スペイン軍と闘っただけでなく、モロッコ国王＝スルタンの権威を否定した「リーフ共和国」を成立させたのである。フランス・スペインによるモロッコ分割を認めない「リーフ共和国」は、フランス領にも影響力を拡大、一時はスルタンの膝元のフェスの占領も目指した。「リーフ共和国」の成立と抵抗はスペインとフランスの植民地主義者や軍部にはもちろん、両国の政治勢力や広汎な社

会層に大きな衝撃を与えた。スペイン軍はこれに驚き、「再征服」のためにさらに軍事力を増強した。さらに、スペイン支持派のモロッコ人（＝「友好モーロ人」と称された）を育成するために金銭や地位の提供さらには直接の戦闘支援をおこなって、「原住民」同士を戦わせる戦略を採った。結局、「反乱」はスペイン軍とフランス軍の共同作戦によって1927年に「平定」される。

2. 研究の目的

(1) モロッコを中心としたアフリカにおけるスペインの植民地統治のあり方——モロッコではスルタンの被委任者たるハリーフアの行政当局とスペイン植民地当局との関係またスペイン植民地当局とスペイン軍との関係など——その他の地域ではスペイン植民地当局と現地住民首長との関係などを明らかにする。

(2) カーイドの権限、「原住民」耕作地の管理とその法的再編成、市場の管理、「原住民」の域内移動についての措置、イスラーム擁護政策など「原住民」統治政策の具体的内容を明らかにする。

(3) スペイン軍の「原住民」兵徴募の方法、「原住民」がスペイン軍に入隊した諸動機、「原住民」兵部隊のスペイン植民地軍の中での役割を明らかにする。

(4) 総じてスペインの植民地統治と「原住民」統治政策は植民地社会をどのように変容させたのかを検討する。

(5) スペインの植民地支配に抵抗した「リーフ共和国」は何を目指したのか、さらに「リーフ共和国」の具体的様相とアブドゥルカリームの植民地・民族認識を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) スペイン陸軍史料館（マドリード）にマ

マイクロフィルムで所蔵されているモロッコ戦争関係文書、スペイン領アフリカ植民地(モロッコ、西サハラ、ギニア)統治関係文書、モロッコ戦争中のスペイン軍・政府の「原住民」政策関係文書(スペイン植民地当局「原住民部」の文書)、「原住民」兵の徴募・動員に関する文書、リーフ戦争中に「友好モーロ人」から提供されたリーフ側(「リーフ共和国」)の構成、その住民との関係など)についての報告文書などを閲覧した。関連テーマを研究しているスペイン陸軍史料館研究員とも研究打ち合わせをおこなった。スペイン陸軍史料館に付設されている図書室の資料も閲覧した。

(2) スペイン軍が蒐集したアフリカ関係資料が所蔵されているスペイン国立図書館(旧)アフリカ資料室の文書(一部はマイクロフィルム)を閲覧した。

(3) マドリード新聞資料館に所蔵されているアフリカ植民地関係の雑誌・新聞、当時公開されたモロッコ植民地関係書籍を閲覧した。

(4) スペイン語・フランス語・英語で公開された最近の研究を摂取した。

4. 研究成果

(1) 20世紀初頭から1930年代までのスペインのモロッコ統治の基本的方法を明らかにできた。それは一方で、金銭や地位の提供によってスペインの統治に協力する「原住民」(「友好モーロ人」)を創り出そうとした。他方で、スペインの統治に協力しないかそれに抵抗する「原住民」(「恐ろしいモーロ人」)は軍事的に制圧されることになった。この統治方策はとくに1900年代のモロッコ統治の開始期(「平和的侵入」の時期)、1909年からのモロッコ戦争とくに1921~1927年のリ

ーフ戦争、さらに1930年代のスペイン内戦においてみごとに発揮された。論文‘El nuevo encuentro hispano-marroquí en el siglo XX: ¿'Moros amigos' y/o 'Moros malos'?’,では以上のことを指摘したが、この点はスペイン人およびモロッコ人研究者からも評価を受けている。

(2) アブドゥルカリームが指導した「原住民」の抵抗運動が強力となり、リーフ戦争が起こると、スペイン軍は激しい空爆を展開した。さらに、大量の毒ガスを使用して抵抗運動を潰そうとした。リーフ戦争では空爆と毒ガス戦による「空からの化学戦」による生存破壊の戦略が史上初めて展開されたのではないか。ヴェルサイユ条約で禁止されたはずのドイツの毒ガスがまさに化学兵器の使用禁止についてのジュネーブ議定書採択の最中にモロッコで使用されたのである。スペイン陸軍史料館の文書を大量に用いて「空からの化学戦」が初めてモロッコで展開されたことを明らかにしたこの研究は、その後のスペイン内戦での空爆の意義にも迫るものである。

(3) 主にスペイン陸軍史料館所蔵文書により「リーフ共和国」の内実を明らかにできた。それはハルカ(戦闘員集団)の形成、政治体の形成、軍事組織の形成の様相などである。リーフ政治体とリーフ住民さらには他のスペイン領住民との関係、「リーフ共和国」の経済状況や社会改革も分析した。その中で、現地の政治的状況を見ると、実際にはアブドゥルカリームはムスリム共同体の「首長」として住民に理解されていたこと、「リーフ共和国」は主に対外的理由によって宣伝されたのであり、実際に「リーフ共和国」が設立されたとは言えないことも明らかにした。アブドゥルカリーム派の他の有力者との争い、「リーフ共和国」によるスペイン側・フランス側

との交渉やヨーロッパ諸国の人々や国際連盟への積極的な訴えについても明らかにした。以上のことを明らかにしたのは日本ではもちろん初めてである。アブドゥルカリームは排外主義を掲げてスペイン軍・フランス軍戦ったのではなく、むしろ聖職者たちの「聖戦」的思考を大いに批判していた。強固な部族主義をも克服しようとした。さらに「ヨーロッパの文明」の積極的導入をも図ろうとしたのである。1920年代のアフリカにおける民族運動において「リーフ共和国」が持った意義とともに、このようなアブドゥルカリームの植民地・民族認識を明らかにできたことも大きな成果である。

(4)モロッコで「原住民」の抵抗に遭遇したスペイン国家とその軍は「原住民」兵力を組織して、「原住民」と戦わせた。それはスペイン人の「血と金銭」をできるだけ節約するためだった。そのために「正規原住民兵部隊」、「原住民警察隊」、ハリーファ軍、ハリーファ警察隊、さまざまなハルカが組織された。主にスペイン陸軍史料館所蔵文書を用いて、これらの「原住民」兵力の構成・人員を明らかにしたうえで、「原住民」が上述の諸組織に入隊した理由、給与・住居・食事・休暇などの「原住民」兵の待遇を明らかにした。さらに、以上の「原住民」兵力がモロッコ戦争において前線部隊・突撃部隊として使用されたことを踏まえて、スペイン軍は「原住民」諸兵力をうまく使うことによってモロッコでの植民地戦争で勝利できたことを明らかにした。また、これらの「原住民」兵力を使用して植民地戦争に勝利できたが故に軍アフリカ派が軍内さらにはスペイン政治・社会においても有力な勢力となったのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

- ① 深澤安博「リーフ戦争におけるスペイン軍の空爆と毒ガス戦——「空からの化学戦」による生存破壊戦略の初の展開か——」『人文コミュニケーション学科論集』1号、55-87ページ、2006年、査読無
- ② 深澤安博「20世紀におけるスペイン人とモロッコ人の新たな遭遇——「友好モロコ人」か「恐ろしいモロコ人」か——」『史資料ハブ 地域文化研究』8号、45-54ページ、2006年、査読有
- ③ Yasuhiro FUKASAWA, 'El nuevo encuentro hispano-marroquí en el siglo XX: ¿'Moros amigos' y/o 'Moros malos'?', Grupo de Materiales Impresos/Hirotaka Tateishi(ed.), *Percepciones y representaciones del Otro: España-Magreb-Asia en los siglos XIX y XX*, pp.79-90, 2006、査読有
- ④ 深澤安博「「リーフ共和国」—抵抗と新政治・社会への挑戦—」(上)、『人文コミュニケーション学科論集』、3号 51-86ページ、2007年、査読無
- ⑤ 深澤安博「スペインのアフリカ植民地研究のための文書館—関連現代研究も視野に入れて」、『現代史研究』53号、85-91ページ、2007年、査読有
- ⑥ 深澤安博「「リーフ共和国」—抵抗と新政治・社会への挑戦—」(下)、『人文コミュニケーション学科論集』、4号 55-96ページ、2008年、査読無
- ⑦ 深澤安博、「リーフ戦争からスペイン内戦へ—生存破壊のための空爆とその衝撃・記憶・謝罪—」、『無差別爆撃の源流』、16-34ページ、2008年、一部査読有

〔学会発表〕(計 1 件)

- ① 深澤安博「リーフ戦争からスペイン内戦へ—生存破壊のための空爆とその衝撃・記憶・謝罪—」、シンポジウム「無差別爆撃の源流」、2007年10月20日、東京

6. 研究組織

(1) 研究代表者

深澤 安博(FUKASAWA YASUHIRO)

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号 60136898

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者